

李孝悌著

野村鮎子・和泉ひとみ・上原徳子・竹田治美・辜知愚・高尾有紀訳

恋恋紅塵——中国の都市、欲望と生活

東方書店／2018年7月／552頁／5000円＋税



大平桂一

本書は台湾学術文化研究叢書の〈第四弾〉として東方書店から二〇一八年七月五日に出版された。著者の李孝悌氏は一九五四年生まれ、台湾大学歴史系卒業後、ハーバード大学で歴史および東アジア言語課程の博士号を取得し、現在は香港城市大学教授、中国文化センター主任の職にある。

各章の構成と紹介

先ず本書の目次を以下に挙げ、内容を紹介しておく。

序

第一章 明清文化史研究の新課題

第二章 桃花の扇もて南朝を送る——

断裂した逸楽

第三章 冒襄と水絵園の遺民世界

第四章 儒生冒襄の宗教生活

第五章 士大夫の逸楽——揚州時代

(二六六〇～二六六五)の王士禛

第六章 袁枚と十八世紀中国の伝統に

おける自由

第七章 十八世紀の中国社会における

情欲と身体——礼教世界の外のカー

ニバル

第八章 都市での彷徨——鄭板橋のう

たかたの人生

第九章 上海近代都市文化の中の伝統

と近代——一八八〇年代から一九三

〇年代

序

ハーバード大学の大学院で清代の檔案資料を読んで「民変」（民衆の叛乱）を研究していた著者李氏がいかにして文化史の研究に転進していったかが語られる。民歌集である、『白雪遺音』や『霓裳統譜』との出会い、博士論文「近代中国の戯曲——社会と政治」の執筆、清代の揚州における王士禛、明末の金陵における冒襄の生活誌への関心など、李氏を動かした要因は多様である。李氏の関心は広大であるが、近世・近代中国の都市文化を、先行研究を駆使してディテールまで再現していこうとする李氏の情熱が本書を生み出したといえるであろう。

第一章「明清文化史研究の新課題」

李氏が大きな影響を受けたアメリカの「新しい文化史」、台湾における「明清の社会と文化」プロジェクトが紹介され、さらに「一種の価値としての逸楽」「宗教と士大夫の生活」にはじまる明清文化史研究の新課題に言及している。

第二章「桃花の扇もて南朝を送る——

断裂した逸楽」

孔尚任の戯曲『桃花扇』の梁啓超の注釈を題材にしている。『桃花扇』は「全編ほぼ南明の実録とみなしてよい」（四八頁）という観点から、それを『板橋雜記』のディテールで補って明末南京の都市生活の一部を再現しようとする意図でこの論文は書かれた。『桃花扇』には名士才人で復社のメンバーである侯方域、陳貞慧、吳応箕らがたびたび登場し、彼らが巻き起こす事件（阮大鍼の殴打事件など）とともに、明末亡国前夜の金陵の都市景観が活写される。李氏は「三月の清明節に、侯方域は歩みに任せて南京城の東まで行き、楊の緑のトンネルを通り抜け秦淮河の畔にやって来た。河の畔には水榭や河房が並んでいる。長板橋を

通って、道沿いの茶寮や酒舫を見やりながら、そのまま奥深い路地の旧院まで来た」（六八頁）と述べ、あたかも侯方域とともに金陵の街を散歩するかのような臨場感を出している。

第三章「冒襄と水絵園の遺民世界」

明末清初に活躍した貴公子冒襄の生涯をたどる。若き日の冒襄は方以智・陳貞慧・侯方域とともに四公子の一人に数えられ、阮大鍼を駆逐しようとする掲文に名を連ねるなど、政治的活動家としても知られた。その彼が明朝滅亡後に龔鼎孳の庇護のもと水絵園で隱遁生活を送り始める。第二節の水絵園以下は、数多くの資料を使って水絵園を丁寧に描き出す。水絵園には短期滞在の客のほかに、長期滞在の客（杜茶村や陳其年）がおり、陳其年はそこで学問を修め、冒襄の歌童と恋愛関係になった。修禊（三月一日）の折には「狂飲の彩りに満ち」（一四〇頁）た催しものが行われたという。第三節では、錢謙益と柳如是の世話で結ばれた董小宛と冒襄の関係が『影梅庵憶語』を主な資料として描かれる。第四節では

冒裏と戯曲のかかわり、第五節では董小宛の死後の水絵園の凋落が語られ、最後の「結論」では、乾隆期の随園へとつながる水絵園の存在意義が論じられている。

第四章 「儒生冒裏の宗教生活」

第三章で文人の生活を生涯享受した冒裏の四度の強烈な宗教体験が取り上げられる。第二節では、冒裏がその幼年時代からすでに神秘体験に囲まれて育ったこと、関帝廟で元旦に引いた御籤がその後の冒裏と董小宛の顛末を暗示していたことが指摘される。籤詩の内容は時間の経過とともに次々に冒裏の前に実現し、二人を恐怖に陥れてゆく。第三節では冒裏が大飢饉の年に悲憤慷慨して大規模な粥の炊き出しを行い、その中で疲労困憊して大病にかかった。その中で臨死体験が語られる。第四節の「夢記」は冒裏の母が大病をした時に、冒裏が見た一連の夢の記録で、彼はその中で母の命を救うために、袁了凡の「功過格」に基づいて善行を積むよう啓示を受けたり、母にかわって命を奪われた長男やいとこの妻の

夢を見たりする。「冒裏は日常生活と神秘的宗教体験のディテールについて、並外れた偏愛と記憶を有しており、私たちはこれらの豊富な資料から、一人の十七世紀の文人／儒生の生活史を再構築することができ。冒裏の事例は、宗教が明清士大夫の文化の中で演じた役割を理解しようとする時、きわめて有意義な参考例になるはずである」(二一六頁)と結論付けている。

第五章 「士大夫の逸樂——揚州時代

(二六六〇～二六六五)の王士禛」

ここに登場する王士禛は、順治十五年進士に及第し、翌年揚州に推官として赴任した。揚州では王士禛は昼は流れるように公務を処理し、公務が終わると賓客とともに船を浮かべ、紅橋や平山堂に遊んだ。李氏は王士禛が蘇東坡に自らをアイデンティファイし、蘇東坡を演じていたことを強調する。李氏はさらに第五節「交遊」で「官僚や処士のほか、王士禛は著名な明の遺臣や遺民とも、程度の差こそあれ、さまざまな接触があった」(二五四頁)と述べ、具体例をあげて丁

寧に論じている^②。特に冒裏との水絵園での交流はこの章の白眉であり、美食、絵画鑑賞、音曲、船遊び、など華麗な宴遊が描かれている。著名な文人陳其年との同性愛的な友情が水絵園で育まれたことは評者にとっても納得のいくものであった^③。

第六章 「袁枚と十八世紀中国の伝統に

おける自由

冒頭張泉泉の『自由と人権』やベンサム、ミルを援用して自由を政治的自由と個人的自由に分け、李氏は後者の典型的な例として袁枚を提示する。李氏の筆下、袁枚は情欲を礼賛し、男色家を公言し、「随園食單」に代表される美食家であり、「荒唐無稽なプロットに、実在の主人公と本物に近い時空の設定を付け加える」「虚実を混交させる手法」(三一頁)を用いて『子不語』を書いた小説家として描き出される。李氏は、「十八世紀の中国社会には、専制皇権と礼教の言説にそれほど干渉、統制されない、かなり広い私的領域が存在していたということである」(三二二頁)「今日直面してい

る人権問題から出発し、二十世紀以来中国の自由主義の発展の歴史を振り返ってみれば、実は二十世紀中国の自由主義には、伝統が具有していたある種の寛容さが欠けていることがよく見えてくるのである（三二三頁）と意味深長な結論を下している。

第七章「十八世紀の中国社会における情欲と身体——礼教世界の外のカーニバル」

先ず清朝政府が明末の「淫猥な戯曲と通俗小説の流行」（三一八頁）に嫌悪感を抱き、排除しようとしていたにもかかわらず、社会の深層には礼教に反する「情欲」のひそかな流れがあったのではないかという問題提起をする。

本章の主な材料は『白雪遺音』と『霓裳統譜』という俗謡集⁴、および崑曲と花部（地方劇）を収録した『綴白裘』である。李氏は先ず俗曲を「別離の浪漫情歌」、「婉曲的に主題へ」向かう俗曲などに分類し、具体例を豊富に挙げ、「十八世紀の女性における複雑で多様な情欲世界」（第三節）を克明に描写する。第四

節「希望とからかいの対象としての身体」では、「情欲の主体としての身体」が取り上げられ、欲望の対象となる唇、笑顔、纏足を称賛した俗曲が取り上げられた後で、『綴白裘』に収録された折子戯に登場する人物——「デブ、大足、醜い顔や身体」（三七七頁）などの Fucks が論じられ、これらは「虚構の舞台の上で、すべてが諧謔と笑いの素材に転換する」（三七八頁）のを観客は目にすることになる⁵。この章の第二節では『白雪遺音』と『霓裳統譜』の成立事情について、李氏は「各地に散らばっていた情欲溢れるテキストは、紛々として妓女や歌手のいる場所に集まり、そして彼らが歌うことで、各地から来た旅商人に伝わった。彼らは一枚一枚情欲の網を織りなす、さらに各地から流れ込んできた情欲を絡めとり、それを呑みこみ吐き出すことで、四方から流れ込んだ情欲を交流させ、放射させる役割を果たした」（三二六頁）と述べており、李氏は narrative の名手であると思つづく。

第八章「都市での彷徨——鄭板橋のう

たかたの人生」

先ず鄭板橋（鄭燮 一六九三—一七六五）の「生涯のあらまし」（第二節）をたどる。揚州府興化県の読書人の家に生まれた彼は、三十過ぎに「時流に背を向け、水墨画を売って暮らす揚州での十年間の生活を始めた」（四一六頁）。四十歳で舉人に合格した彼は、四年後殿試に及第し、河南省と山東省で知県を務め、上司と衝突して罷免された鄭板橋は引退して揚州に帰り、書画を売る生活に戻る。続く第二節では、李氏は鄭板橋が経世済民の価値観を抱いて知県としての職務を全うし、私生活では僧侶と深い交流を持ったことを強調する。第四節「都市の思い出」では、科挙に及第するまでの落拓時代の都市での生活と、及第後の余裕に満ちた生活を対比させている。第五節の「結論」では、「鄭板橋は塩商がもたらした商業環境に依存することで、都市の片隅で悶々と生活していたが、商人および商人文化の抜け目のなさに対しては、強烈な批判精神を持っていた。このように商業文化の影響を受け入れつつ、

かつ商人が主導する文化の発展に対して憂慮を抱くという矛盾したコンプレックスは、揚州学派の学者たちにも見いだすことができる^⑥（四三六頁）と述べているが、評者は鄭板橋の立ち位置についてここまで鋭い言説を目にしたことがない。

第九章「上海近代都市文化の中の伝統と近代——一八八〇年代から一九三〇年代」

本書で最もビジュアルな一章である。第二節で李氏は『点石齋画報』（一八八四—一九〇〇）と『良友画報』（一九二六—一九四五）を材料として上海という都市における伝統文化と近代文化の相克を探究している。李氏は両紙の記事やイラスト・写真を総合的に観察した結果、『点石齋画報』は伝統文化を中核とし、記事のスタイルは『聊齋志異』を踏襲、イデオロギーは道德教化と因果応報からなり、新しい文化や西洋文化にも敏感に反応するが、それは奇聞のレベルで報道するという結論を下す。第三節「新舞台と改良戯曲」は幕間劇であり、

「新茶花」（小デユマの「茶花女」の改編劇）と「済公活仏」という二つの演目を取り上げ、総合芸術としての改良演劇が縦横に論じられる。第四節では『良友画報』は「民智」を開くという啓蒙的な目的で発刊されたのであったが、『良友画報』が宣伝しようとした思想には一貫性がなく、二十四孝の故事が取り上げられたり、革命芸術家の作品が取り上げられたことが論じられる。この節で取り上げられている図版は、男女のヌード写真、

男女のスポーツ写真など実に多様で、我々を驚かせる。最後に李氏は「この三つの異なる段階の文化モデルはいったいどの程度、都市生活の本質、あるいは都市住民の精神イメージを表象しているのだろうか？」（中略）：『点石齋画報』の創出した怪奇イメージは、当時の一般的な上海住民の精神構造を忠実に反映しているのではないかと推測できる。「新舞台」は、伝統的な文化素材と新時代の情報を矛盾なく混在させ、一般民衆の新旧入り交じった心理状態をも反映することができた。／『良友画報』の方は、意

匠を凝らして創り上げた明るい近代世界が、二十、三十年代の上海の変容をどれほど反映しているかについて、さらなる「考察が俟たれる」（四九三—四九四頁）と結論付けている。

評者私見

本書は実に様々なテーマを取り上げながらもそれをディテールまで再現しているという著者李氏の情熱にあふれた書物である。それと同時に「富裕と貧窮、都市と農村、情欲と礼教、奢侈と質朴、逸楽と叛乱、宗教と理性」といったマクロ的な視点も忘れられておらず、この二つの視点の均衡がよく取れた良書である。また翻訳もとてもこなれており、「散文や戯曲については、訓読文を避け平易な日本語訳にすることにした」という方針によって、さらに読みやすいものになっている。また、李氏による詳細な注釈も省略されておらず、学術書の翻訳として尽善尽美と言えよう。

訂正すべき点を挙げるとすれば、第五章「士大夫の逸楽——揚州時代（一六六

〇(一六六五)の王士禛の二二三頁に「甲辰の年十月によくやく礼部侍郎にうつった」とあるのは「礼部主客司主事」の誤りである。また第八章「都市での彷徨——鄭板橋のうたかたの人生」の四三頁に引用されている「揚州」詩の第三聯、第四聯「千年戰伐百餘次、一歲變更何限人。盡把黃金通顯要、惟余白眼到清貧」の訓読「千年の戦伐百餘次、一歳の変更何ぞ人に限らん。尽く黄金を把りて顯要に通ずるも、惟だ余のみ白眼もて清貧に到る」は、「千年の戦伐 百餘次、一歳の変更 何限の人。尽く黄金を把りて顯要に通ずるも、惟だ白眼を余して清貧に到る」とすべきであるように思われる。「餘」字を訳本では「余」に作るが、原著では「餘」に作り、この部分は二聯とも対句のはずだからである。

第四章「儒生冒裏の宗教生活」に出てきた冒裏の「夢記」は、陶弘景の「周氏冥通記」や日本の明恵上人「夢記」を連想させる、まことに興味深い宗教的神秘体験の記録である。純粹な夢の記録である同時代の黄周星「選夢略刻」や董説の

「昭陽夢志」と比較することにより、明清初の士大夫の時代精神がさらに明らかになるのではないかと思う。

評者は本書を読むことによつて、自分が研究対象としている明清の社会と文化および当時の士大夫に対して抱いていたイメージが一新され、以前よりはるかにクリアになったと思う。自分の研究に欠けていたものは、正に李氏が本書で追求した顕微鏡と双眼鏡を同時に使う研究方法だったのである。

注

- 〈1〉 明末江南の花街については、大木康氏の『蘇州花街散步——山塘街の物語』（汲古書院、二〇一七年）がある。
- 〈2〉 李氏の文章に補う点があるとすれば、それは王士禛より若い世代との交流である。王士禛は揚州時代におびただしい数のエピソードを生んでいる。
- 〈3〉 王士禛は若いころ香奩体の詩を書いており、その中にも同性愛的な傾向が見とれる。
- 〈4〉 明代の俗語集『山歌』については、

大木康氏の『馮夢龍『山歌』の研究』（勁草書房、二〇〇三年）がある。

〈5〉 このあたりに引用された俗曲や寸劇はダイバン・アーバスの写真集やフェデリコ・フェリーニの「道」の世界を連想させる。

〈6〉 洪亮吉「又書三友人遺事」に出てくる汪中のエピソード参照。